

5-7 環境教育の指導：自然との共生を学ぶための活動

自然には、子どもの好奇心を揺り動かす魅力がたくさんあります。草花を見つけてつみとったり、野菜を育ててみんなで食べたり、小さな虫に関心を示したり、魚やザリガニに興味を覚えたり、子どもたちは、いろいろな形で自然とふれあいながら成長していきます。自然を身近に感じることで、ヒトも自然の中に生かされている存在であり、すべての生命が自然の恩恵を受けながら共生して存在していることを学んでいきます。

植物を育てる

日本の自然環境には季節の変化があり、時期それぞれに美しさと特徴があります。そのような自然環境のもとで、草花や野菜を育てる活動は、幼稚園教育が始まった頃から取り入れられてきています。自分たちで土を起こし、その季節にふさわしい種や球根、苗などを植え、世話をしながらその生長を間近で見るとは、幼児の持つ好奇心や探究心をかきたて、科学的な興味や関心を育む機会を提供する活動と考えているからです。

とくに、自然が失われつつある地域においては、草花や野菜の発芽から開花、そして実を結ぶという自然の営みを、子どもたちが目にする機会が少なくなっています。幼稚園で、日々手間をかけ、育て方を学びながら花や野菜を栽培するという直接的な体験を通して、子どもたちは自然の営みを知り、自然への畏敬や不思議さに心を揺り動かされていくのです。

教育的意義

- ・ 土をやわらかくして種をまいたり、球根や苗を植えついたりして世話をしていくことを通して、植物が生長していく過程を知る。
- ・ 植物の種類ごとで異なる発芽の仕方や、生長の仕方などから、その植物の特徴を知り、他の植物との違いに気づいていく。
- ・ 自分が植えた植物の世話をしていくことで、植物に親しみ感じ、植物の生命力、生長の規則性、不思議さなどを感じとっていく。
- ・ 植物が枯れたり、生長しなかったりする体験を通して、日々世話をすることの大切さや大変さなどを知り、継続的に物事に取り組む力が育っていく。
- ・ 身近で育てたものを収穫し食することで、収穫の喜びや満足感を味わう。
- ・ 自分が世話している植物にきれいな花がさいたり、実ができたりすることに感動し、その体験が、さらなる好奇心や探究心へとつながる。
- ・ 植物の生長を間近でみる体験を通して得た気づきや疑問から、自然界や自然の法則について興味や関心が湧き、科学的な思考へとつながっていく。

草花や野菜を育てる

畑で育てたサツマイモの収穫です。

シャベルで深く土を掘った後は、手でサツマイモを傷つけないように掘っていきます。

土やサツマイモの感触を肌で感じています。

収穫したサツマイモを比べて遊んでいます。

大きさの違いによって「お父さん芋」「お母さん芋」「赤ちゃん芋」と名前をつけながら並べています。

大小の分類や、重さの違いなどを自然に経験していきます。

収穫した後の芋づるを利用して遊んでいます。

縄跳びをしたり、自分の身に巻きつけたりして楽しみます。

子どもの自由な発想を受けとめて、教師もうれしそうに見ています。

芋づるで作ったなわとびを見て、今までなわとびに意欲を示さなかった子どもも、挑戦してみようという気持ちが出てきたようです。

収穫した芋を焼き芋にして、みんなで食べています。

落ち葉をこどもと一緒に集めて、サツマイモをその中で焼きました。

落ち葉の燃える音や匂い、煙、そしてわくわくしながら出来上がりを待つ楽しみは、五感を通しての体験です。

大きくなるのを楽しみに、大根の水やりをしています。

「お水飲んだ」「喜んでるね」などと、植物に思いを寄せて世話をしています。

毎日の世話を通して植物の生長に気づいていきます。

収穫したての大根を友達に、見せに来ました。

友だちも近づいてきて、鼻を大根にくっつけて^{にお}匂いをかいています。

採りたての野菜の^{にお}匂いの体験です。

留意点（配慮すること）

- ・ 子どもたちに、植物を大切にすること、命を大切にすることを育むためには、教師自身が植物を大切に育て、世話する気持ちを常に持ちましょう。
- ・ 種まきや収穫の時期（季節）が、植物の種類によって違います。見通しをもって栽培計画を立てましょう。
- ・ 草花や野菜は、子どもが親しみやすく、育てやすいもの、また、植え付けが簡単なものなど、子どもが扱いやすいものがよいでしょう。
- ・ 水やりを使う道具は、子どもの身近に置くようにしましょう。いつも近くにあることで、世話をしようとする意欲につながっていきます。
- ・ 教師も一緒に世話をしながら、植物の水やりには適量があることを知らせましょう。植物の様子を見ながら世話をしていくことを通して、自分の行動が調整できるように援助していきましょう。
- ・ 植物の生長につれて、その時期にふさわしい手入れが必要です。「大きくなったね。もっとご飯を欲しがっているよ」と、植物の代弁をしながら肥料を^{ほどこ}施したりして、子ども自身の生活と重ねることで、より親しみをもつでしょう。
- ・ 子どもの発見や感動、疑問、不思議に思ったことなどを、教師は共感をもって受けとめて、解決する手がかりを一緒に考えていきましょう。子どもの持っている科学的な思考の芽を育てることにつながっていきます。

活動の応用またはヒント

- ・ 自然にあるものを園の環境に取り込んでみましょう。観葉植物などを、子どもの目の高さに飾るのもよいでしょう。
- ・ 子どもの身近にある公園や草むらを利用して、草花を遊びに取り入れたり、植物に直接触れるたりして、自然と一体となる体験をすることもできます。
- ・ 食べた果物の種を埋めて発芽を楽しんだり、野菜に付いている根の部分を植えたり、水栽培で楽しんだりして、身近なものを教材として取りあげることができます。
- ・ 水やりの道具は、空容器などの底に穴を開けて子どもと一緒に作ることもできます。
- ・ 空容器や大きめの袋（麻・ビニールなど）などを栽培する容器として利用できます。
- ・ 自生している植物の中から、自分の植物として好きなものを選び出して、継続的に観察していくこともできるでしょう。

生き物とふれ合う

幼稚園では、虫や小動物などとふれ合う活動を大切にしています。ウサギやモルモットは、抱くとあたたかく安らぎを与えてくれます。青虫やオタマジャクシは変態が早く、その過程を楽しむことができます。ダンゴ虫やアリは、探し集める楽しみがあります。また、カニは、横に歩くその姿が見ていてとても面白いのです。ザリガニのはさみやカブトムシの角は、子どもたちにとって魅力的なものです。

いろいろな生き物と接する中で、子どもたちの興味や関心は広がります。初めは乱暴に扱ったりすることもあるでしょう。しかし、教師が優しく扱うことを伝え、態度で見せることで、やがてその生き物ならではの、ふさわしい関わり方をするようになります。

そして、共に生活し、世話をしていく中で、愛情がわき、子どもたちにとって大切な友達のよう存在になっていくことでしょう。また、生き物と関わることで、誕生や死に遭遇し、生命の営みを学ぶとともに不思議さを感じ取る貴重な体験となるでしょう。全ての生き物が自分たちと同じように、たった一つの命をもって生きているのだということを、五感を通して感じていくことができます。

教育的意義

- ・ 直接ふれたり、遊んだりすることを通して、生き物を思いやる気持ちや可愛がる気持ちが芽生える。
- ・ 毎日世話をする事を通して、責任感が身に付いていく。
- ・ 生き物とふれ合う生活の中で、驚いたり、喜んだり、感動したり、不思議に思ったりなど心揺れ動く体験を通して、科学的な好奇心や関心が育まれる。
- ・ えさをやったり、間近で観察したりすることを通して、その生態や性質を体験的に知る。
- ・ 誕生や死に遭遇することで、喜びや悲しみなど様々な感情体験をするとともに、生命の尊さに気付く。
- ・ 食べる・食べられる関係を目の当たりにし、生態系、自然界の法則を学んでいく。
- ・ 友達と協力して生き物の世話をしたり、同じ感動を味わったりすることで、友達とのつながりを深めていく。

生き物とふれ合う活動の展開



近くの原っぱに、虫取りに出かけました。

草むらの中をじっと見て、バッタやコオロギがないか探しています。

取った虫は、大事に虫かごに入れていきます。

「なんていう虫だろう？」と友達と一緒に、図鑑で調べています。

図鑑は子どもたちの手の届くところに置いて、いつでも見られるようにしてあります。

どのような環境で飼って、どのようなえさを与えればよいのかななどを、自分たちで調べます。



取ってきたカブトムシを、みんなで絵に描いてみました。

カブトムシを取って来たときの感動から大きく描く子ども、よく観察してじっくりと描く子ども、それぞれの印象を思うままに表現しています。

園庭で見つけた青虫の幼虫を、飼育ケースに入れて世話をしてきました。

ある日、青虫は動かなくなり、やがてさなぎになりました。

すっかり変わったその姿に、子どもたちは不思議そうに見入っています。

さなぎが羽化して、蝶が誕生しました。

子どもたちは、驚きと感動で胸がいっぱいようです。

「ちょうちょが生まれた！」と興奮して友達に見せに行く子どももいます。

毎日観察することで、青虫が成長してさなぎになり、やがて蝶になるという変態の過程を学びました。

脱皮を繰り返して大きくなるザリガニに、子どもたちの関心が集まります。

「強そうだね」

「こっちの方が大きいね」

はさみを振り上げるザリガニに関心を示しています。

留意点（配慮すること）

- ・ 教師自身が慈しむ心を持って生き物とふれ合うことが、子どもたちの中に、生き物と共生し、命を尊ぶという心を育てることにつながります。
- ・ 保育の中で生き物を扱う場合は、単に鑑賞するだけでなく、抱いたり直接触れたりできるものがよいでしょう。そのためには、危険のない生き物を選びましょう。
- ・ 生き物の飼い方については、教師が本で調べたり、専門家に聞いたりしながら、学んでいきましょう。
- ・ 虫や小動物を見に、戸外に出かける場合には、周辺に危険がないかを十分調べておきましょう。ある程度の範囲を決めておいて、その中で自由に探せるようにするのもよいでしょう。
- ・ 生き物とふれ合うのが苦手な子どももいるでしょう。無理強いをせずに、まずは教師や他の子どもたちが生き物と一緒に楽しく遊んでいる様子を見せ、安心感を持たせていきましょう。
- ・ 子どもの驚きや発見を大事に受けとめ、共感したり、周りの子どもたちに伝えたりしていきましょう。
- ・ 生き物が死んだ場合には、死を受けとめながら、生命や生きるということの大切さを伝えていきましょう。

活動の応用またはヒント

- ・ 虫かごがなければ、廃材や空き容器を使ってそれに代えることができます。
- ・ 生き物に関心を持たせるために、その生き物が登場する手作りの教材（物語、ペープサー等）を用いるのもよいでしょう。
- ・ 自分がふれ合った生き物を絵に描いてみたり、そのものになりきって身体を動かして遊んでみたりして、驚きや感動をいろいろな表現活動につなげていくのもよいでしょう。
- ・ 生き物の世話は、数人ずつの当番制にするのもよいでしょう。友達と協力し合いながら世話をすることで、より責任感を持って関わるようになります。
- ・ 生き物も自然の中で人間とともに生きていることを伝えながら、ある程度観察したら自由にあげましょう。